

「今年のプレゼント第1号は、きみです！」

園長 高地 敬

『ゆかいなゆうびんやさん』という絵本をもう30年も前に大藪先生からもらってすごく楽しんだのですが、中に入っていた手紙のほとんどが無くなっていて、とても残念です。でも新発見。その翻訳が、『100万回生きたネコ』の佐野洋子さんでありました。七五調で訳してあって、見事です。同じころ『急行北極号』という本があって、いろんなところでその話をしてきたのですが、改めて読むと、私が勝手に強調した話になってしまっていて、残念です。でも、これも新発見。『急行北極号』の翻訳は村上春樹さんでした。

『急行北極号』は、サンタから素敵な音の鳴る鈴をもらうのですが、その鈴の音が大人には聞こえない。けれども、僕は大人になっても鈴の音が聞こえた。

「本当に信じていれば、それはちゃんと聞こえるんだよ」で終わっていました。

鈴をもらう前に、「サンタは僕たちの方に歩いてやってきて、僕を指さして、言った。「(プレゼントの第1号は)この子に決めるとしよう。何がほしいかな？」と、ここは淡々と書いてあるのですが、私の脚色はこうでした。「サンタはそりの上に乗ってみんなを何度も見渡し、そして、みんなに聞こえる大きな声で、『今年のクリスマスプレゼントの第1号は、きみです！』と僕を指さして、叫びます。『さあ、何がほしいかな？』。サンタの大きな袋に入っているおもちゃではなく、そりの鈴がほしいと言ったというのでもいい話なのですが、「第1号はきみです！」と自分が一番大切にされていると感じることは本当にうれしいことだと、私自身が考えてきたのだと思います。

子どもたちは、きょうだいがいて、幼稚園のお友達がいて、だからみんな平等だと言われればその通りなのですが、「平等は知っている、けれども自分が一番に思われている」と感じる事が大事なのではないでしょうか。クリスマスに神さまからいただくイエスさまというプレゼントは、まず、わたしに向けられておりました。今年も、「神さまはまずわたしを大切に思ってくださいって」ことを感じるクリスマスになればと思います。